

幼児の質問に対して

大脳生理学の大家だった時実利彦先生は「一生のうちで、最も吸収力の強い時期は幼児期である」とおっしゃっています。そういう幼児期の幼児は、知識欲が旺盛で、見るもの聞くものにつけて、「これなあに」「あれなあに」と質問を連発して止まるところを知りません。

しかし、その答えによって、その子の知識が組み立てられていくのですから、幼児の質問は大事にし、ていねいに答えてやらなければいけません。

ただし、いくら知識欲旺盛でも、幼児が欲しない時に、欲しない事柄について説明してやってはいけません。食欲のない時に、無理矢理に口に詰め込むようなもので、消化できないばかりか、食欲をそこね、体をそこねることになります。

湯川秀樹博士の『旅人』という書物によりますと、博士のお母さんは、博士が訊ねた時にはどんな仕事をしていても、手を休め、博士の方に向き直って、その目をじっと見つめながら答えてくれた、と言います。

こういうお母さんに育てられたから、博士は立派な人になれたのだ、

と私は思いました。子供の質問を、このように尊重し、真剣に答えてくれれば、だれだってそれを大切に受け入れ、「また質問しよう」という気持ちになります。それが、その子を成長に導くのです。

これに反して、忙しい時や機嫌をそこねている時など、子供の質問を、剣もほろろの冷たい仕打ちで追い返す母親があります。こういうことが重なりますと、決して質問しない子供になってしまいます。

幼児が早い時期にこうなってしまったら、もう知能の高い子供になることは不可能です。だから、どうしても質問好きの子供にしなければなりません。それには、母親は、常に子供の質問に対して、快く誠意を以て返答してやる必要があります。